

# 青森市の都市構造

## 「はじめに」

高 村 繁

都市を調査する場合、都市基盤、都市機能に関するもの等、過去あらゆる角度から研究されてきた。ここでは青森市の都市構造について考察してみた。

構造という言葉は広くいろいろの意味に用いられるが、ここでは地域の上にあらわれ、都市を構成しているもの、すなわち地域構造といった意味に解して考察した。

都市の地域構造についても形態要素についての研究もあるがここでは種々の都市機能が如何に組合っているか、又機能に応じて如何なる地域分化が生じているかみた。

具体的には政治、経済、文化、交通の中心的都市として今や躍進途上にある青森市に於てオ1に各機能によつてどのような地域構成がなされているか、オ2に青森市の商店分布状態からどのように業種が配置され、いかなる特色をもっているか、オ3に工業においてどのような地域構成がなされているか、オ4に都市人口の膨張に伴つて住宅地域が近年どのような変化をたどつてきたかの諸点について検討した。

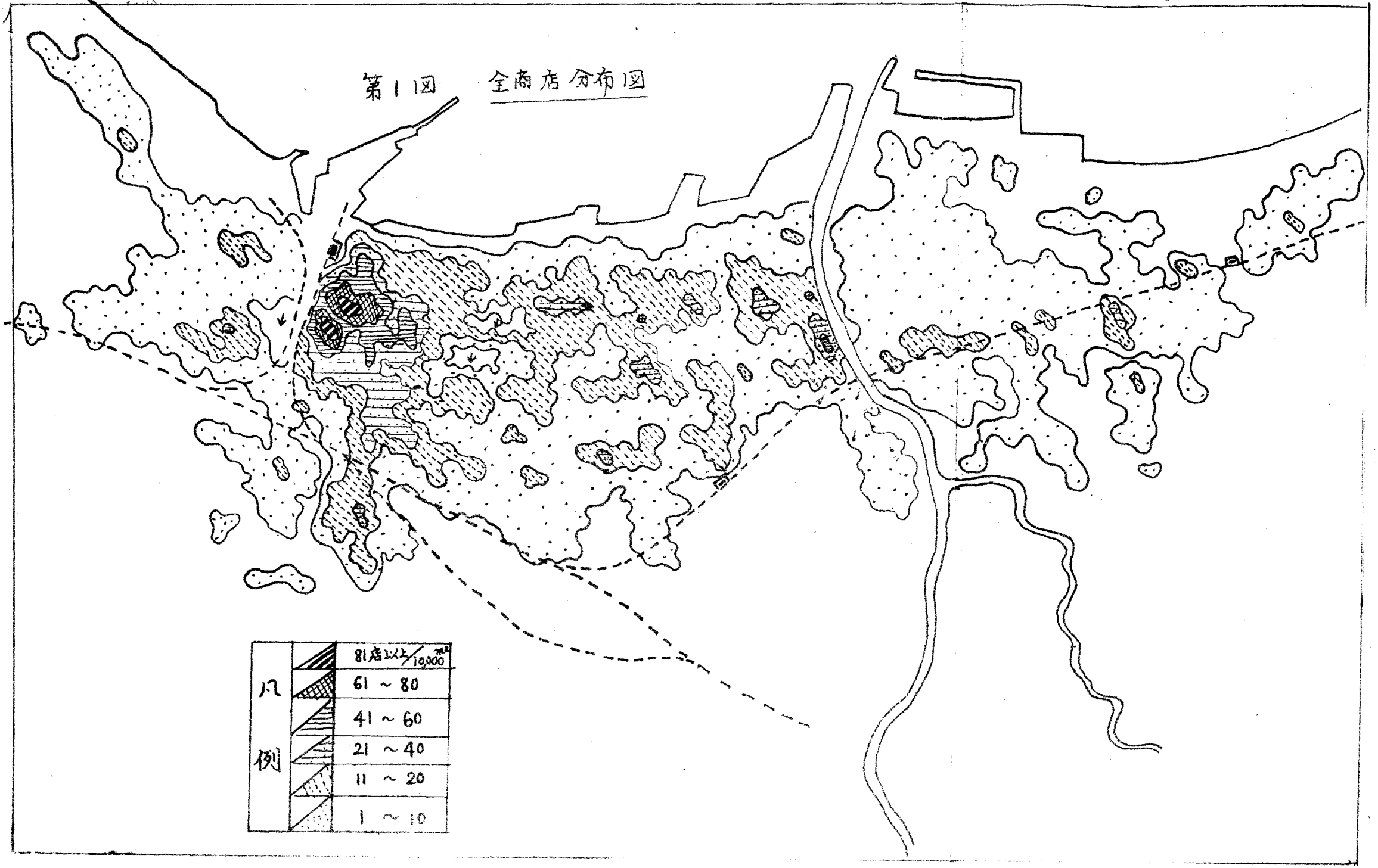
## (1) 商業地域について

本市の商業は昭和20年の空襲で営業不能になつたが昭和26年で戦前に復興し昭和37年には商店数(4795)、従業員数、年間販売額でも県下オ1位である。業種構成では食料品43.2%、飲食店18.9%、卸売11.8%であり、特に近年の飲食店の増加は著しいものがある。しかし、個人経営88.9%、従業員数1~2人の商店が67.1%を占めていることから察せられるように非常に小規模であり経済的安定性を欠いており組織立つた経営方法で進むことが望まれている現状である。

本市の全商店の分布はオ1図のように東は堤川、西は駅構内に囲まれた地域、戦災で全焼した旧市域に集中している。最も商店密度の高い地域は駅前古川(小字名一古川千刈、古川柳川)であり、次いで新町、古川美法、長島(一通称、夜店通り)、柳町、堤町、北金沢(一通称、旭町)が高く、10,000㎡で10~20店が分布している。駅前古川が最も高くなっていることは終戦による影響が大である。この地域は露天商として引揚者の生活維持として出発したもので現在では業種がリンゴ、菓子、乾物、衣服、小間物、飲食店等と分化し駅に最も近く、気市場を囲つともつているという有利な条件のため増々活況を帯びている。

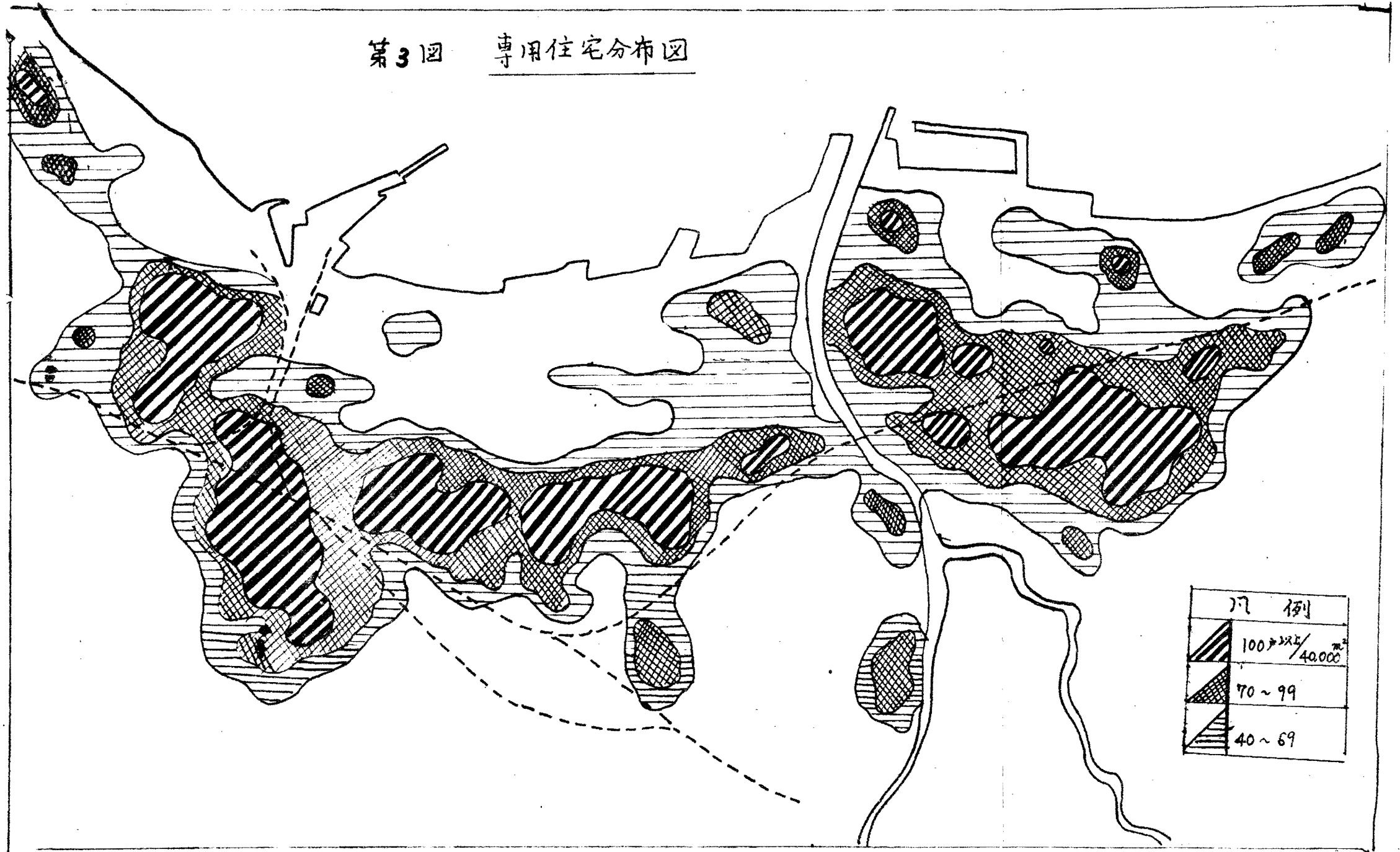
しかしこのような駅前古川、新町を中心とする商業地域は歴史的にみて古いものではなく新興商業であり、藩政時代には東部堤川付近の薄労町付近を中心とする町が繁栄してゐたがその後、渡邊者の増加、交通道路の変遷、駅の移動により浜町、大町から安方町、新町古川

第1図 全商店分布図



凡 例		81店以上 10,000人
		61 ~ 80
		41 ~ 60
		21 ~ 40
		11 ~ 20
		1 ~ 10

第3回 専用住宅分布図



というふうに東から西の方への移動があつた。明治、大正、昭和初期まで比較的長い間、青森市のオ一の商店街であつた大町は今や業種構成に於いても過去大きな変化があり、現在、旭町等の商店街のように周辺の性格を示めしていることから商業というものはいかに交通に左右されるものかを物語っている。

次に業種別にみていくと一般に集中性をもつ飲食店に於いては例外でもれず駅前古川地区に集中している。 $10,000\text{m}^2$ に20店以上の密度を示すところは古川だけであり、10～19店では堤町が加わるだけで、新町、大町、柳町、浜町、浪打の一部に5～9店の密度地域がある。大町、浜町は背後に漁港、商業港があること、又、銀行、事務所等も数多いため、衣料品店等に比べて多く集中しているものと思われる。

又堤町に集中性を占めているのは近くに漁港が存在していること、住宅地域からのバス乗降地点である関係であると思われる。

次にもつとも買廻品として集中性をしめすものとして衣類品店の密度分布をみると最高密度地域は前者と同じく $10,000\text{m}^2$ に5～9店を占め、次いで新町、浪打、旭町の3地域に集中している。この分布で特色をなしていることは前者と同傾向を示めしているが、大町、浜町等過去に栄えた地域や柳町と堤町に挟まれた町内にあまりみられないこと、又、前者と比較してみて浪打地区での分布状態が小さく、沖館地区の方が前者の飲食店の分布範囲より広くたつてゐること、又、飲食店で少し集中性をみせた堤町が分布密度が小さく、それにかわつて旭町に集中性がみられる。この地域は古川との連続というよりも、この道路を通過する人々、あるいは住宅地域に囲まれていることによつて維持しているものと思われる。

次に化粧品、薬品店をみると全般的に各地に散在しており、本市に於いては食料品店等と同じく散在的である。しかし大町、浜町を中心とする地域に前記の2品に比べて相対的にみて数が多いこと、又小売を兼ねる卸業が多いことは船問屋、旅館業、等によつて過去からの資本の蓄積があること等が影響しているものと思われる。

以上の3業種についてみたが、ほとんどが駅前古川に集中し新町等はあまり高密度をなしていないがこの理由として、新町はメンストリートとして多種業種が均等化され、建築物としても整備され、他に比して安定性のある1つの商店街を形成していること、又背後には官公署が多いためである。このようにみると商店の代表的な飲食店、衣類品、は必ずしも有名メンストリートにその密度が高いわけではない。

## (2) 工業地域について

本市の工業は海陸両交通上有利であると言われながら近代的な鉄鋼業、化学工業等は少く、

食料品47.5%,木材19.6%,家具木製品8.5%,印刷5.4%,その他(化学、機械、ゴム、金属)15.8%(35年)であり、地場産業が大部分である。そのため県内での地位をみても36年には工場数でわずかに八戸を上回っているのみであり、従業員数、出荷額では新産都市指定に伴い増々重化学的工業の比重が大きくなっている八戸にすでに追越されている。しかし本市も33年以後からの工場誘致の実績をみると八戸市の13工場に対して青森市は8工場であるが八戸は大部分鉄鋼業等で本市は食料、木紙、段ボール、ゴム等である。

これらの進出企業を含めて38年には、634工場あるがその中で従業員30名以上の工場は61工場ある。これらの分布状態をみると食料品、木材、印刷関係が多く主に港湾地域に偏在している。これらの集中地域を細分すると西部沖館地区、中央地区、東部堤川河口地区に区分でき南方に2~3の比較的大規模の工場が認められる。食料品(主に水産加工、但し菓子、醸造は中心部、周辺部に散在)と木材はその多くが港湾即ち堤川河口、沖館に集中しており印刷関係ではその殆んどが市の中心部に集中している。次にこれらの工場の設立と地域との結びつきをみると最も古いものは印刷(新聞)の東奥日報でついで浪打の造船業である。浪打地区と沖館地区を比較すると浪打地区には大正時代の設立工場が非常に多く、等間隔で設立され、戦後20年間ぐらいで残された用地に工場が設立され沖館地区より形成が早いように思われる。本市の設立をみても昭和の21~32年までの11年間で23工場(47%)の設立があり、次いで大正年間10工場、明治、昭和初期には沈滞した状態であり、大正時代の伸びは木材に現われており、戦後の増加は食料品に認められる。又現在廃業した工場(9)の中には大規模な工場もありその殆んどが軍需関係であり、その立地場所も現在誘致企業のため市が工場用地と指定している地域にすでに立地しており、周辺部にも散在的であった。

### (3) 住宅地域について

本市の人口は昭和39年8月で23万を突破し東北才2位の都市となつたがそれらの人口は面積で1.4%の市街地に62%が集中しており33年より増加数は合併地域よりは低い152%の増加があつた。市内で最高人口密度地域は松森町の364人/1haで次いで鍛冶町が続いている。中心部は全ての町内が高密度ではなく、代表的商業地域の中心地駅前古川は99人以下で最低クラスで工業地域(浪打)と同値を示している一方、新町、堤町、大町の商店街では200~249人であり長島、等と同値で異なつた分布をしている。又人口の移動変化をみても商店率の最も高い駅前古川をはじめ米町、浜町、柳町、寺町、塩町では人口密度も低く年々(33~39)減少傾向を示しており同じ条件であつても新町、大町、堤町、鍛冶町は人口密度も高く増加傾向にある。又商店率が低く人口密度も比較的小さい浪打、沖館、大野(北金沢)は年々増加傾向にある。

以上のように都市内の人口もあるセクターによつて人口密度が変化していると思われるが、一部を除いては都心部から外部周辺への移動は明らかである。これらの現象は新築家屋に単的に現われてきている。次に37年の住宅詳細図に基づいて作成した専門住宅の分布をみると3図のように鉄道の制約のため、商業、工業の発展のふくれている東北線、奥羽線沿えに家屋の高密度地域が見られる。又新築家屋数・農地の宅地転用化からみても沖館（千刈）、大野（北片岡、北金沢）、浪打（佃）の発展がみられ37～38の2年間に急速に発展した湊町奥野（勝田）の住宅地と合わせると住宅地域は完全に東北線、奥羽線に沿った帯状を形成してきた。しかしこのような進展は市街の発展として必然のことであるかもしれないが最高密度を示している長島、浦町の一部、つまり東北線の以北の地域は過去の鉄道線路の南方移動（現在）後に形成され、今や専用住宅も多く又商店数、製造工場数も多く混合されている地域であるから現在再び東北線南方移動が決定したのであるから、住宅地域の形成にも大きな変化が生ずるものと思われ、南方移動した分だけ又住宅化するのではないと思われる。

又住宅不足の解消を目的とした公営住宅の地区に集中し、しかも近年の建設は外縁部に伸びておりしかも規模が大きくなつており、これ等の建設が未だに住宅不足問題の解決策としても、増々住宅地域形成に大きく影響してくるのではないと思われる。

## 「むすび」

以上のように3地域についてみたが本市の場合、機能による地域分化は大都市のように明確に区分することは不可能であるかもしれないが、前者の3つの図より地域区分ができる。